

國學院大學学術情報リポジトリ

西洋人と日本漢字：
部首引き漢英字典における検字法システム化の試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: カイザー, ステファン, Kaiser, Stefan メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000138

西洋人と日本漢字

—部首引き漢英字典における 検字法システム化の試み—

シュテファン・カイザー

0. はじめに

いわゆる表音文字と違って、漢字の検索には西洋世界の辞書のabc順もなく、日本のように50音やイロハ順のような配列法も本来は存在しない。代わりに、筆画数により配列したり、あるいは共通の部品のもとに集めたりする方法などが使われたりしてきた。しかし、abcやイロハなどの数十字と違って、百、千の単位におよぶ漢字の部品を、「あかさたなはまやらわん」などのように暗記する方法は現実的ではない。

漢字をいわば母乳といっしょに吸収してきた漢字圏の人には、部品、部首、画数などが身近なものであるし、字を検索するとき読み方が通常わかっているため、音訓索引などを利用でき、苦勞することはあまりない。知らない字に遭遇しても、部首・画数で探し当てられるばあいが多かろうが、それがうまくいかないケースでも、そもそも不完全なシステムだという認識があるので、それなりに対応できる。

一方、非漢字圏の漢字字書の利用者は、ほとんどのばあい、読み方がわからないから字書を検索する。したがって、つねに字形から探すことになる。特に、中級以上の学習者は、テキストを読むときに多くの漢字を検索しなければならず、それはたいへん多くの時間を要する作業である。部首・部品などの知識を少しずつ身につけても、部首が同定できないケースも多い。1つの漢字が複数の部首・部品を含むのが一般的なもので、そのうちのどれで探せばよいかなど、試行錯誤が多くなる。

本稿では、そのような問題に、辞書のabc順に慣れており、2字目以降も配列がシステム化されている西洋人が、漢字を「外から」見ているなかで漢字本来の「いきあたりばったり」検索をどのようなシステム化を試みたかを記述・分析するが、

対象は日本語対応の部首法に修正を加えた20世紀の漢英字典に限定する。

1. 「部首」について

1-1 部首法による配列

漢字の配列・検索には、古来、さまざまな方法が考案された。沖森他編(1996:130)では、中国・日本の字書を構成上、以下の3種に分類している。

- 1 漢字の字形（部首分類）
- 2 漢字の韻（音分類）
- 3 漢字の字義（意義分類）

今回分析の対象としたのは、1の部首分類で、これは周知のように紀元100年ごろ成立した「説文解字」ではじめてとられた方法のようである（阿辻1989:127）。「説文解字」では、540部をたてたが、その後次第に240部が主流となった。

近現代の漢字字典で一般的に使用されている214部は、1615年ごろ成立した「字彙」に遡るが、また同書から部首の配列も、各部に所属する漢字の配列も、画数の少ないものから多いもの順になっている（佐藤1996:173）。その体裁は、1716年刊の「康熙字典」に受け継がれ、日本の「大漢和辞典」などの漢和字典でも踏襲されている。

1-2 部首の定義

そもそも部首とはどう定義されるものなのか。佐藤編（1996:19）には以下のような説明がある。

漢字を字義や字形の類似から、いくつかの部に所属させ、それぞれの部の代表とする漢字を部首と呼ぶ。部と部首は、学者が便宜的に定めたものであって、その選び方、数、並べ方はさまざまである。

つまり、客観的な根拠が本来存在するものではなく、恣意的に決められたものである。佐藤（同上）が例としてあげる「水部」には「水」の他には「氷」「氵」の異体もあるが、いずれも典型的には水や液体などに関連のある字がこの「水部」のもとに集められるⁱ。佐藤（同上）はさらにいう。

…「求」を「水部」に置くように、単なる字形の類似によるものもあり、部に所属するすべての漢字と部首とが字義（字源）において密接な関係があるとはかぎらない。

換言すれば、部首は本来漢字の意味や字源を反映するものとして考えられるが、便宜上字形の表面的な類似や、検索の便により部に配属される字もある。

1-3 漢和字典における部所属

漢和字典は部所属の問題をどう考えているか、覗いてみる。たとえば「広漢和辞典」（以降「広漢和」）の凡例「親字の配列と見出し」の中に次のような記述がある。

「康熙字典」の部首分類が合理性を欠き、あるいは検索上不便と認められる文字については、適宜、部首を移した。たとえば、之はもとのノ部3画から、部2画へ、巡はもとのㄣ部4画から辵部3画に移したことなどである。

一方、「新字源」をみると、凡例に次の記述がある。

「康熙字典」が便宜的に他の部首に所属させている文字は、検索に著しいさまたげがないかぎり、合理的な部首に移した。

〔例〕「修」は人部から彡部へ、「到」は刀部から至部へ移すなど。

「之」・「巡」について「新字源」を確認すると、「巡」は同じ「辵部」だが、「之」は本来の「ノ部」に所属している。また、「修」・「到」を「広漢和」で引いてみると、「修」は同じく「彡部」だが、「到」は康熙字典と同様「リ部」にあるように、個々の字書によって同じだったり異なったりしていることがわかる。

上記のように、漢和辞典では部を「移した」例は1, 2あげたりしているが、移動の範囲や数などは、確認できない。一方、本稿で対象の漢英字典の中には、Nelsonのように部首移動の割合を示しているものがある（2-4-1参照）。

1-4 漢和字典の部配属と字源との関係

字源の説明をみると、これも字書によって異なったりすることがわかる。

上記4字について確認すると、「之」は「広漢和」では「指事。止+一」とあるが、「新字源」では「象形」とある。「巡」は「新字源」では「会意形声」で、「広漢和」でも「形声。辵+川声。」とあるⁱⁱ。また、「修」について見ると、「広漢和」では形声。彡+攸声。」で、「新字源」でも「会意形声」である。一方、「到」は「広漢和」でも「形声。至+刀声。」で、「新字源」も同じである。

漢字の部首は本来意符であると考えられるⁱⁱⁱ。「広漢和」が「巡」を字源上正しい部首に移したことになる。同じ基準では「到」・「修」はそれぞれ「至部」と「彡部」とになるので、「新字源」ではともに正しい部に移している。つまり「新字源」

の「合理的な部首」は、「字源上正しい部首」ということになる。

一方、「広漢和」のばあいも、「合理性を欠き」は「巡」の移動を指していると思われる。一方、「之」に関しては、意符がないため、「検索上不便」というものに該当すると考えられる。一方、「到」が「リ部^{iv}」にあるのは、「康熙字典」の「刀部」と同じであるが、「修」は「康熙字典」では「人部」に入っている。なお、「到」に関する両者の配属の違いについて考えると、「新字源」の字源説では、「形声。至と、音符刀」となっている一方、「一説に到…と人（刀は誤った形）とから成り…」という字源説も紹介しているが、それでも部は移動させている。一方、「広漢和」では「人」説には触れないが、「リ部」のままにしてあるので、字源説と部首が合わない。

1-5 正しい字源説と検索の便の狭間

本来漢字の検索のためのものであるはずの「字書」は、上記のように習慣上「漢字の成り立ち」を加味した配列になっている。そうなると、字源や六書についての知識がない限り、検索がストレートにはいかないことになる。例えば、「和」のばあいは、声符が「禾」なので、「口部」となる。また、「分」でも、声符が「八」だから、「刀部」所属となる、など。字源説は漢字の構成には有効な知識であるが、検索の便から考えると、かえってシステム化の妨げになることは明らかである。

また、上記1-2で見た「求」や1-3、1-4で言及した「之」のように、字源とは無関係な形で部首に所属させられている字もある。たとえば、象形文字「也」（乙部）、「主」（丶部）、「民」（氏部）はそもそも構成要素が存在しないから、本来は部首の概念には合わない（「民」と「氏」はともに象形だが、形が似ている以外、意味は無関係である）。また、旧字体の知識がないと部首の検討がつけられない字もある（2-41参照）。

このように、次元説、旧字体など、意味に関係する知識は、字形の検索には有用どころか、有害である。徹底した字形引きシステムからは意味を追放する必要がある。

2. 日本語対象の漢英字典

幕末・明治はキリシタン宣教師に続く来日西洋人の第2の波になるが、彼らは多くの文法書や辞書を作成した。しかし、ほとんどがローマ字表記のもので、漢字の字書は少なかった。

そうした中で、中国で数多く作成された漢英字典^vの系統を引くものとして、Gring (1884)がある。日本の漢字を扱う字書ではあるが、本書が参考としてあげている文献はすべて西洋人が中国で行った研究成果で、親字を伝統的部首にした

がって配列している。160ページ以上におよぶイントロでは、聖書その他27冊の本における大まかな頻度情報が載っているのは（例えば、10,000回以上使用など）、本書の特徴といえるが、検字法に関するアイデアは見当たらない。なお、Chamberlain (1899)は辞書ではなく、漢字の学習書であるが、収録の2,350字はやはり新聞でよく使われる活字など頻度を考慮している。本格的な部首引き漢英字書は、20世紀に入ってからである。

なお、大正5年に日本で出版されたロシア出身のロゼンベルグ (1916) は、部首、読み、画数の知識がなくても、字形だけで検索・配列のシステムを考案している。

2-1 本稿の対象

本稿で扱っている検字法システム化の字典は、以下の4書である。Rose-Innes (以下R-I)、Nelson、Spahn & Hadamitzky (S&H)、Haig-Nelson (H-N)。下記では、それぞれ中心に扱っている漢字の字体に基づいて順番付けをするが、それが大体時代順にもなっている（H-NはNelsonに別のシステムを上乗せする、いわばハイブリッドなので、最後に別扱いをする）。R-Iは当用漢字以前、Nelsonは当用漢字、S&HとH-Nは常用漢字を中心としている^{vii}。H-Nは、Nelsonの当用漢字ベースを常用漢字に改めており、またNelsonの「詳解漢和大辞典」参照番号をJISと「諸橋漢和大辞典」の番号に置き換えている。なお、「常用漢字」はいずれも改定前の旧常用漢字を指している。

2-2 共通の問題意識

4書はいずれも同じ問題意識をもって作成されている。それは、1-5で示した例「和」・「分」のように、多くの漢字は複数部首から成り立っているが、伝統的な漢和字典では、複数のうちのどれを部首とすればよいか、決まりがない点である。つまり、そうした当たり外れを避けるためのシステム化をはかっているのである。これらの字典は影響関係も当然あるが、それについてほとんど触れられていない^{viii}。しかし、発想上の類似点が多いことは、以下の記述を見ると明白である。

2-3 類似した規則

字源説を無視した検字法のシステム化では、「杉」・「和」、「安」・「分」のように2つの部首があるばあい、徹底した優先ルールが必要になる。つまり伝統部首（漢和字典）では、「杉」は「左部首」、「和」は「右部首」、また「安」は「上部首」に対して「分」は「下部首」となるが、こうした矛盾を解消しなくてはならない。また、より多くの部首があるときには、いかなる基準、あるいは順序で部首を決定していくのかのルールが必要になる。さらには漢字を構成上どういう基準で部品にわけるか（たとえば、何をもって「囲み」と定義するか）などのルールも必

要になる。

本稿で複数の字書にわたって繰り返し登場する基本的なルールを「グローバル規則」（使い方は字書によってやや異なるばあい、本文で説明する）と呼ぶことにし、本文中参照しやすいうように番号（順不同）を付しておく。それに対し、限られた範囲のルールを「ローカル規則」と捉えるが、それらは該当箇所ですぐで扱う。

2-3-1 グローバル規則（順不同）

G-1、画数の多い部首優先（包括的な部首優先、たとえば「冫」よりは「𠂔」）

G-2、左・上優先（左右、上下両方が部首のばあい、「和」「分」など）

G-3、2～4面を覆う（「囲み」の条件、但し「歐」「殿」などの並列は不十分）

G-4、線の切断禁止（「事」は上下に分解不可）

2-4 R-I、要素リストから部首決定

部首検字法システム化最初の試みは、Rose-Innes（初版1924）のようである。当時、多くの版、あるいは似たようなタイトルで出版されたもの（Rose-Innes (1927), (1936), (1937)）のようだが、検索システムに関しては共通である。本稿で使用的是のは1937年版だが、表1, 2はより鮮明な1936年版に拠った。1937年版の収録漢字の選定は、当時の印刷会社の新聞・雑誌用活字書体のセットと、日本人アシスタントが「上田大辞典」収録の15,000字中「知っていた」5,000字ほどを付き合わせた基準を使用したとある。

本書は、戦前に作成されたが、1959年の第4版の再販として現在でも（Rose-Innes 1959/2011）出版されている名著である。また、アメリカやフランスなどでも出版され、第2次世界大戦中のアメリカ軍日本語コースでも使用されたようである（quod.lib.umich.edu）。親字数は5,000字ほどで、熟語数は25,000程度である。

2-4-1 検字用要素分類：形と位置

本書の表紙の見返しに検字のための一覧表があるが、さっと見ると偏旁冠脚のリストに見える（表1参照）。しかし、Introduction (:i-v) で著者が説明しているように、これは部首のリストでは決してない。リストにない部首もあれば、3,4回現れる部首もある。また、部首ではない要素も多い。なお、表1のアラブ数字は画数別に配列された要素の画数で、マス内の漢数字は伝統部首番号である。

[illegible]

一覧の中心部分であるLEFT、RIGHT、TOP、BOTTOM（上下左右）では、それぞれの要素が現れる位置により分類し、画数順に配列している（画数順になっていない、残りの2グループについては後述）。LEFTには、8画の4つ目の要素のように、それ自体が部首ではなく、伝統部首（舌）を含むものがある。また、RIGHT 6画2行目には「式」が見えるが、その要素が「弋」という部首に所属していることが、漢数字でわかる。TOPの中にも、6画の2行目の「哭」などの上部（＝口部）があり、BOTTOMには7-15画2行目の「蠱」などの下部（＝虫部）などがある。

なお、マスの上に塗り潰しの三角があるのは、類似した形の、より複雑な要

素が存在することを示している（たとえば、TOP 3画2行目の「宀」は、「冫」に含まれているが、「冫」の方が画数が多い）。これは、G-1規則と関係している（次節参照）。

次に、上部にあるWRAPPERS or ENVELOPES（「包み」、以下WRAPPERS）を見ると、垂れ、繞、構えの類がグループ化されている（詳細は次節「A類」参照）。そして、左下部にCENTRE or CROSSED BY OTHER LINES（中央位置、または他の線で交差されているもの、以下CENTRE）があるが、これについては次節の「C類」に説明がある。

なお、複数の位置に現れるということで数回リストされているものを探してみると、例えば「日」はLEFT（4画1行目）、CENTRE、TOP（4画2行目）、BOTTOM（3/4画3行目）にそれぞれ含まれている。また、「毛」は、「毳」などのWRAPPERSとRIGHT（4画3行目）とに2度登場する。

2-4-2 漢字構成のA, B, C類と優先規則

イントロダクション（:ii-v）のHow to determine the radical（部首の特定法）では、漢字を構造上A, B, C類にわけた上で、部首特定のルールを示している。

2-4-2-1 A類

A類は「包み」構造で、その規定範囲はG-3で定義されている。また、部首を決定する際は、G-1が適応される。なお、A類は本書収録漢字の1割弱を占めるという。

2-4-2-2 B類

収録漢字の大半を占めるB類は「層や切れ」（layers or strips）、つまり自然と横や縦にわかれる構造とある。たとえば、「不」は2層（1+3画）からなる。あるいは、「乗」も2層（2+9画）でできているという。また、「京」のように3つの層からなるものや、「券」のように上下にわけられるものなどが該当する。その上、G-4の条件（上記「事」）をつけている。B類内の規則としては、G-2が適応される。例で示すと、「分」は上下ともに部首があるが、G-2規則では「八」が部首となる（伝統部首は、「刀」）。一方、「怒」の場合は、上の層が部首ではないので、当然ながら「下」が部首となる。

2-4-2-3 C類

本書収録の5,000字程度の3%程度を占めるというC類に関しては、一般規則がないと述べている。では、C類の部首をどう求めるか。これは、CENTREグループの問題なので、そのグループを拡大して再度掲載する（漢数字は、伝統的部首番号）。

表2 C類の部首特定法

CENTRE or CROSSED BY OTHER LINES												
し	乙	一	口	丨	十	丿	人	弓	大	戈	日	木
五	五	一	三〇	二	二四	六	九	五七	三七	六二	七二	十五

上記C類に関するルールは以下のものである。漢字が他の線に交差されたり、中央の位置を占めたりする複数の部首を含むばあい、枠の中でもっとも右寄りのものが部首となるというローカル規則を立てている。

たとえば、「事」には交差された部首「一」、「口」、「丿」が含まれているが、表2で最右の「丿」が部首と決定される。また、「東」には「日」と「木」がともに中央に位置しているが、最右の「木」が部首となる。さらに、「來」には「人」と「木」という部首があるが、リストの右方にある「木」が部首に決まる（伝統的部首は「人」）。

本書には、部首のわかりにくい漢字のリストも付録としてつけてあるが、これには必要情報だけを簡単にあげている。たとえば、「乗」の下方に数字4, 9が示されているだけだが、これは「乗」が部首4「ノ」に所属し、総画数が9画であることを示している。

2-5 Nelson: 階層的部首決定システム

戦後1960,70年代を代表する漢英字典はNelson（初版1962）で、当用漢字ベースで作成されているが、Classic Edition (1975/1995)として現在でも販売されている。4,775字と 671字の異体、合計 5,446字の漢字が収められている。また、熟語の数が7万弱とあって、当時の漢英字典の代表格ともいえる。収録範囲については、「戦前・戦後の、精選された50冊以上の本」を注意深く漢字と語彙について調査したと序で述べている。

2-5-1 部首配列と「失われた部首」

R-Iが考案・出版された時代は当用漢字など字体の簡略化以前⁸⁾のものであるのに対し、Nelson (1962)は当用漢字時代に作成された。伝統的な214部首を使用しているが、検字法はR-Iと比べると、さらに首尾一貫したシステム化をはかっている。ここでは、Classic Edition (1995)を使用するが、これは1975年の第2改訂版の再発行であるので、同じく当用漢字ベースである。

検字上、当用漢字の字体が特に問題になるのは、旧字体の簡略化によって部首が消えてしまった漢字である。これはNelsonではLost Radicals（失われた部首）とよんでいるが、他の親字と同様に、Radical Priority System（部首優先システム、以下RPS、下記参照）で検索できる仕組みになっている。結果的には12%ほどの

漢字が、伝統的部首とは別の部首に配属されるという（この数字には、RPSルールによる部首移動も含まれている）。

「失われた部首」の例をあげると、「当」は旧字体「當」では「田部」に所属するが、「田」の部品が消えた結果、本書では「小部」に入れられている。なお、親字項目の最後に、「田」という形で、伝統的な部首が示されているが、これはすでにR-Iで採用した方法である。また、「与」の旧字体「與」は「臼部」だったのが、Nelsonでは「一部」に所属している（S&H, 0a3.23）。あるいは、「到」は「至部」に掲載されているが、見出し項目最後の「リ」が示しているように、本来は「刀部」である^x。

2-5-2 RPSの内容と説明

H-NのForewordでは、RPSについて「漢字検索のための、階層的に配列されたアルゴリズム^{xi}」と評価しているが^g、Nelsonでは、APP 3. How to Determine the Radical（部首の決定法）のなかに説明がある。

RPSは、12 Stepsによる質問項目を順に追って確認し、最初に肯定されるものが部首に決定する仕組みである。表現形式は、6. TOP? *Is there are clear TOP radical?*（上? 明確な上方部首はあるか）のような設問の後に、例や規則などをあげているが、本稿では簡略した形で最初に12ステップを示し、続いて例や説明を加える形をとる。

なお、最初の11ステップについては、G-1が適応される。また、部首の認定法としては、線の内部への入り込み禁止というローカル規則を立てる。これは複数回登場するので、便宜上L-1とする。

12のステップ

1.全体? →2.唯一? →3.囲み? →4.左? →5.右? →6.上?
→7.下? →8.北西? →9.北東? →10.南東? →11.南西? →12.高い?
（なお、APP. 13にそれぞれのステップに対応するチェックリストがある）

この12ステップは、便宜上、「(基本) グループA, 1.~7.」と「(その他) グループB, 8.~12.」に分けることができよう。著者が主張しているように、最初のステップ1.~7.で97%の部首が決定されるので、それ以外は例外と見てよいだろう。

2-5-2-1 Aグループ (STEP 1.~7.)

STEP 1.は、APP.13の一覧を参照してもわかるように、伝統的な214部首がすべて当てはまるわけではなく、158字だけが該当する^{xii}。一方、2.では、乃 (ノ)、メ (い)、及 (ノ)、久 (ノ)、了 (丨) の5字だけが当てはまるという。

3.については、G-3のもとに、例を挙げている。「截」の伝統部首は「戈」だが、

ローカル規則L-1で却下される。また、「包」は本来「勹部」だが、「勹」は「上」なのか「囗」なのか、G-3ではっきりさせている。

4.のわかりやすい例は「杉」・「和」で、左右両方が部首なので、左に決定となる。

一方、ローカル規則として、「左を完全に支配し (completely dominate)、遮るものがない」とあるが、「師、后、劇」の例を示している。ただ、APP. 4.「部首の追加情報」をみると、「部首2」として「丨」だけではなく、短いヴァリエーションとして「中」や「史」の第1画も該当することがわかる。これは、「支配」とはいえないのでないか。なお、「中」は本来「丨部」で、「史」は「口部」である。

5.については「幽」を例示し、部首は右の「丨」だという^{xiii}。

6.「空」では「乚」が部首となる (G-1で「乚」は却下)。他の例は、「男、分、善」などで、「分」は、上記R-I (B類) と同じ捉え方である。

7.にはさらに、「それが天蓋 (canopy) の下にあったりなかったりすることに注意せよ^{xiv}」というローカル規則を設けている。例としてあげられている「急、学、嚮、梵」では、上が部首ではないため、下が部首になる。なお、「嚮、梵」は、天蓋の下「口」や「丶」が部首、とある。「嚮」では、伝統部首と同じ結果になるが、「梵」は「木」が伝統部首である。

以上の7つのステップでは、漢字の97%程度の部首が決定されるという。残り3%が「その他」では字の四隅という別基準を用意し、それに「北西」などの方角を当てる。最後の12.は、いわば「その他のその他」で、最後まで残ったものの処理として設けられている。

2-5-2-2 Bグループ (STEP 8.~12.)

8.の例「報」は、ステップ1.~7.までは該当がなく、ステップ8.「北西」から時計回りにチェックしはじめると、そこに「土」がある。 (「十」は、G-1で却下)。また、「截」は、「十」が部首となる (「戈」はL-1で却下、「北西」の「土」も同様)。なお、「報」の伝統部首は、「土」である。9.「求」では、「北西」には何もないため、次の「北東」で「丶」に決定。10.の例「君」は、「南東」の「口」に決定される。11.の例「虱」は囲い部首にも見えるが、見返しの部首リストやAPP. 13の囲み部首リストのように囲み部首ではないので、「南西」の「虫」となる。

12.にはR-IのC類同様、交差部首・珍しい位置が含まれるので、以下のローカル規則^{xv}で処理される。

- (a) 最高
- (b) 少画
- (c) 最左

(a)の例「事」は交差部首で、高く突き出る部首「亅」をとる。一方、「民」突き出る部首がないが、もっとも高い部首「一」をとる。また、「与」では同様に、一番高い「一」(短い方)をとる。(b)に従って、「二」はとらない。)さらに、「又」では、「又」も「丶」部首だが、「又」の方が高い。そして、「夫」は交差する部首で、やはり高い方(ノ)をとる。

(b)2つの部首が同等の高さのばあい、よりシンプルで画数の少ない部首(通常、1画)をとる。「丹」では、「冂」も「丶」も同じ高さだが、「冂」よりシンプルな「丶」をとる。「冊」も同様に、「冂」ではなく、「丨」をとる。

(c) 部首が同等の高さ、同様にシンプルなばあい、左をとる。「井」では、右の「丨」より左の「ノ」をとる。「必」も同様に右「ノ」より左「丶」が部首となる。

2-6 S&H: 部首大削減に基づく階層的決定法

Spahn & Hadamitzky (1996、初版1989) は、検字法のイノベーションとして、熟語をすべての構成漢字から検索できる点と、部首法を大幅に改善した点をあげている。本書はJIS1,2水準を含む6,000字ほどの親字(異体を含めると7,000字ほど)と、48,000以上の漢字熟語を収録している。本稿では、部首法の改善に限定して記述・分析する。

2-6-1 79部首法

表紙の見返し(左)には、本字典で使用している79の部首が、2画から11画までの画数グループ別に配列してある。下記の表3では、6画までの部分を示す。

How to Use this Dictionary (この辞典の使い方) のなかのHow to Look Up a Character (漢字の検字法) で説明しているとおり、同一画数グループ内では、部首が漢字のなかで占める通常的位置によって左、右、上、下、そして2面以上の囲みの順で配列してある(一覧でも、マスのなかで位置がわかるようにアレンジしてあるのは、R-Iと同様である)。

表3 S&H(1996)の79部首表 (一部)

2	イ	ㇿ	子	𠂇	𠂇	リ	力	又	冫	一
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
3	十	ト	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇
	k	m	n	o	p	q	r	s	t	
4	ㇿ	土	扌	口	女	巾	𠂇	弓	彳	彳
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
5	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇
	k	m	n	o	p	q	r	s		
6	木	月	日	火	衤	王	牛	方	女	欠
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
7	心	戸	戈							
	k	m	n							
8	石	立	目	禾	衤	田	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	

また、部首には画数とアルファベットの組み合わせによるコードのようなものが与えられている。例えば「イ」は2aで、2画グループの最初の部首だとわかる。なお、見返し右ページの「異体付き」リスト (表4) では、異体が2(a)のようにカッコつきで示されている。

表4 S&H(1996)の79部首表 (一部)

2	イ	人	人	ㇿ	𠂇	子	了	𠂇	𠂇	リ	リ
	a	(a)	(a)	b	(b)	c	(c)	d	e	f	(f)
3	刀	力	又	冫	一	十	十	ト	𠂇	𠂇	𠂇
	(f)	g	h	i	j	k	(k)	m	(m)	n	o
4	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇
	(o)	(o)	p	q	(q)	(q)	r	(r)	(r)	t	

なお、一覧の下方にはそれぞれ、「部首をもたない漢字は疑似部首の0a部に収録」という注がある (2-63-3)。

2-6-2 部所属字の配列法

本字典での漢字の掲載箇所は、部首コードと部首以外の画数（いわゆる「残余画数」residual strokes）の組み合わせによる。たとえば、「降」は部首2dと、残余画数7からなるので、2d7というグループに属する（そのグループの所属字は2d7.1, 2d7.2, 2d7.3…と、個別漢字の背番号（本書では「記述子」descriptor）の順に並べられている）。通常、数ページの範囲内で目標漢字が探し当てられるが、同部首・同画数の漢字が多いばあい、順番が上記2-6-1と同じく、部首が漢字のなかで占める通常の位置にしたがって配列され、さらに下位順として残余部の次のような字形ベースで並んでいるという：分解不能、分解可左右、分解可上下、分解可囲み／被囲み^{xvi}。

2-6-3 部首決定法

部首を決定するためのルールは、How to Determine the Radical of a Character（漢字の部首の決定法）に示されている。Nelsonと類似した方法で、8項目のチェックリストを順に追う方法をとっている。

8項目

1.全体 → 2.左 → 3.右 → 4.上 → 5.下 → 6.囲み → 7.どこでも → 8.どこにも

部首の認定法としては以下の2つの規則をたてる。(1)は完全な画で、部首に属さない線に交差されていないもの^{xvii}、(2)はG-1。

(1)を吟味すると、実は2つの条件からなっており、aは完全な画（=G-4）、bは他線交差。例を見ても「寺」と「本」の2つがあがっている。前者では「乚」が排除され（不完全画＝線の切断）、後者では「木」が除外される（交差線）。なお、「本」の伝統部首は「木」である。

表現形式は、「0.漢字全体、あるいはその異体が部首なら、それが部首^{xviii}」であるが、以下でナンバリングや表現は、上記のNelsonで使った簡略化表現に合わせる。また、このシステムは、3つのグループに分類できると思われる。

2-6-3-1 Aグループ (1.～6.)

1.全体 → 2.左 → 3.右（左右部首＝左） → 4.上 → 5.下（上下部首＝上） → 6.囲み

Aグループの示し方を説明すると、3.と5.のカッコ内部分は、G-2が適応されるという意味である。また、「囲み」が左右上下の後にあり、Nelsonとは順序が一部違う（2-7-3参照）。さらに、「唯一」が「全体」の直後ではなく、「囲み」の後に

位置するのは、部首を大幅に減らした結果と思われる（下記B(a)参照）。

2-6-3-2 Bグループ (7.)

- (a) 唯一
- (b) 多画 (=G-1)
- (c) 最左
- (d) 最高

項目1.~6.までで部首が確定しない漢字は、「どこでも」あらゆる位置で部首を探ことになる。Bグループの例と説明を見る。

(a)「契」は、2(f)で「リ部」になる。(伝統部首は「大」だが、本書の部首リストにないので、「唯一」で決まる。

(b)「向」・「哉」はG-1により、それぞれ2rよりは3d、3dあるいは2kよりは4nに決定される。

(c)「喪」では、3bと3dがともに同じ最大画数であるが、3bがより左方で、決定。「鼻」では、5fが5cより左なので部首となる。

(d)「舗」・「段」ではそれぞれ3sと3b、2hと2sが同画数部首だが、より高い位置にある2つ目の方が部首に決定される。なお、「裁」では同じように4aと4nが同画数部首だが、「戈」の方が高い位置である。

2-6-3-3 Cグループ (0a部)

項目7.でも部首が該当しないばあいには、「どこにも(ない)」という「0a部」になる。「0a」の所屬字は画数順に字書本体の最初に配列されている^{xix}。

例をあげると、「包」は0a5.9、つまり5画字の9番目に配置されている。同様に、「来」は0a8.9、「事」は0a8.15にある。なお、「正」(記述子なし)は0a5.9の次に見えるが、2m3.3が正しい位置として参照されている。理由は以下のように考えられる。本書には「一」「止」の部首がないため、0.~5.の項目ではヒットせず、6.(a)の「唯一」部首で決定される。いうまでもなく、Nelsonのたいへん限定的な「唯一部首」と違い、79部首ではこの範疇はかなり広がりをもつと思われる(2-7-3)。

2-7 R-I, Nelson, S&Hの比較考察

2-7-1 「基本」と「その他」分類

以上のように、R-I, Nelson, S&Hはいずれも、漢字をその構成にもとづいて分類している。R-Iでは「包み」のA類、「層・切れ」のB類、そして例外・個別のC類である。一方、NelsonとS&H自身ではグループわけはしていないが、R-Iと同様に「基本」と「その他」の基準で区分してみると、NelsonとS&HのAグループ

が概してR-IのA,B類に相当する。一方、「その他」のC類に対応するのは、NelsonのBグループとS&HのグループB,Cである。

ただ、S&HのB,Cグループは、「どこでも」位置の「その他」と、79部首に属さない「その他」ということで、R-I, Nelsonの「その他」3%よりは割合が多くなると思われる。S&Hには「その他」の割合に関する記述はないが、0aの所属字(Cグループ)を数えると、263字もあり、それだけで(6,000字中の)4.4%ほどになる。それにBグループの「唯一部首」などを加えると、10%程度になると思われる(2-7-3)。

まとめると表5のようになる。

表5 「基本」と「その他」分類の割合

	R-I	Nelson	S&H
基本	A, B類 (=97%)	Aグループ (=97%)	Aグループ (=90%)
その他	C類 (=3%)	Bグループ (=3%)	B, Cグループ (=10%)

2-7-2 リスト制と階層制

Rose-Iでは、Nelson, S&Hのようにステップを追うのではなく、部品とその位置から部首を決定するシステムになっている。一方、Nelson, S&Hの「全体部首」は表1にはなく、説明もない。試しに表1にあたってみると、たとえば「水」については、TOP 4画の形が「全体」とほぼ同じ字形である。また、「臣」・「韋」などもそれぞれLEFT 6画とRIGHT 9画に見えるから、形と部首番号から「全体」にたどりつけると思われる。一方、「老」という部首は「全体」としては表にないが、漢字の部品として実際現れる形「耂」はTOP 4画にある。こうして「全体」は「部分」の形からほとんど特定できると思われる。一方、「内」、「面」「黄」の部首は表には載っていない。本体で確認してみると、それぞれ伝統部首として設けてあるが、所属字はない。唯一、「内部」の比較的よく使われる伝統的所属字「禽」は「人部」に移されている。こうして本書は伝統的な214部首にもとづいてはいるが、所属字の少ない部首は一覧からは探せない。

2-7-3 Nelson, S&Hにおける階層制の順序

ともに階層制を使用しているNelsonとS&Hを比べると、Aグループの中での「囲み」の位置が異なることがわかる。また、S&Hの「唯一部首」は、Aグループではなく、Bグループで登場する。

まず、両者におけるAグループ内位置・順序を考えると、「囲み」の位置は部首の決定には無関係と思われる。たとえば、「近」をNelsonで検索すると、ステップ3で確定する。逆にS&Hで探すと、6で確定する。そもそも「左右、上下」に

関してはG-2により順序には敏感であるが、「囲み」は「左右上下」の前でも後でも影響はないはずである。

そう考えると、S&Hのように「全体」から「半分」構成（左・右、上・下）を経て、より複雑な形態の「囲み」（S&Hでは6つのパターンが区別されている）にステップが進む方が利用者にはわかりやすいのではないかと考えられる。

「唯一」に関してはNelsonでは5字しか該当しないというので、例外として記憶し次のステップに進むという考えで2.という順になっているかもしれない。しかし、部首が79部に激減しているS&Hではかなり増える項目に思われる。S&HのTable 16.のチェックリストでは、次のように例示されている（カッコ内はS&Hでの[唯一]部首）止[ト]、右[口]、契[刀]、友[又]、缶[十]、面[冂]。しかし、S&Hでは他にも該当する漢字はかなりありそうである（油[㼱]、礼[㇔]、到[刂]、攻[攴]、英[艹]、寺[土]、血[皿]、至[土]、広[广]、近[辶]、…）。そもそも「唯一」部首の観点から検索する必要があるのかという疑問はある。S&H（Table 16.）であげられている例の中にはわかりにくいものもあるが、上記にあげてみた追加例のばあいは、左（油、礼）、右（到、攻）、上（英、寺）、下（血、至）、囲み（広、近）、などで探した方が合理的と思われる（検索の結果、利用者は他に部首がないことに気づくかもしれないが）。

2-7-4 S&H部所属の不合理？

S&Hで検字すると、しばしば漢字の「常識」に反する所属例がある。たとえば、「求」は2b「㇔部」に所属している。しかし、システムの順番どおりに進めると、それなりに理屈は通っている（6.までは）ヒットせず、7.(a)の「唯一」例と考えられる）。また、「式」が4n「戈」部にあるのは、最初は誤りのように見えてしまうが、異体付の部首リストを見ると、4(n)として「弋」という異体がある。いうまでもなく、これは伝統部首の常識からいうと、「しきがまえ」と「ほこがまえ」という、画数も意味も異なる部首を無理に統合したようにも見える。しかし、漢和字典でも「心」「忄」、あるいは「水」「氵」「氷」のように同じ部首でも画数が異なるばあいが珍しくないので、意味を考慮しない検字専門のシステム(1-5参照)としては妥当ともいえる^{xx}。

2-8 H-Nと新検字法URI

Haig 他 (1997)はNelson (1975/1995)を改訂したもので、収録範囲もJIS 1,2水準の漢字を含めたことで、5,446字から7,107字に増えている。NelsonのRPSの説明は、修正を加えた形で残しているが、Forewordでは、有用性が証明されているため、RPSを廃止するには躊躇したが、RPSに入れ替えた趣旨の説明がある。ただ、RPSを残しながら付録として加えていることで、ハイブリッド的存在だといえる。

2-8-1 包括的部首索引 (URI)

本書には付録として、230ページにおよぶURIをつけている。これは、漢字に含まれる、常識的に考えられそうなほとんどの部首要素から検索できるシステムである。そのため、重なりが多くなるわけである。

URIの掲載の仕方では、単漢字（親字項目）が伝統的な214部種の順で、残余画数に従って配列されている。残余画数が同数の場合、伝統部首の順に従っている。なお、214部首の後に301-303番の「新部首」として「ク」「マ」「ツ」が加えられている。

例示すると、「部首1一」の「残余画数3」の最初にあるのは、「与 J4d3f/M20 6」という情報である。最後の番号（6）はNelsonにおける漢字番号で、この番号が上記例のようにボールド体になっているばあいには伝統的部首に従っていることを示している。なお、中間にある2つの番号（原典では分数のような形で縦に並んでいる）はJISコード（J）と諸橋大漢和辞典（M）の漢字番号である。

URIの検字ルートからピックアップして説明すると、「稲」「黒」はそれぞれの5つのルートで検索できる（以下の例では、残余画数は「+」の後の数字で示している）。

稲：「禾部」+9、「丨部」+13、「爪部」+10、「日部」・「臼部」+10

黒：「黒部」+0、「火部」+7、「田部」+6/7、「土部」+8/9、「里部」+4

「稲」で72・73部が横に並んでいるのは、「日」・「臼」を部首番号に従って分けてはいるが、区別が難しいため、重なってリストされている意味である^{xxi}。

一方、「黒」のばあい、「田部」・「土部」のように、残余画の数え方が複数考えられるときには、どちらからも探せるように工夫してある。ところが、Nelsonでは、G-4の適応で、「截」における「戈」や「善」における「羊」は部首に選択されないのに対し、Haig他の「黒」では、「田」や「土」がG-4に反する。URIはRPSとは違う基準の規則を使用している。

「考えられそうな」部首をどこまで考えるかという問題もある。「稲」からは、他に「ノ」・「木」・「小」なども、未経験者の目から考えられよう。

2-8-2 H-NとNelsonにおけるRPS

2-5-2のように、NelsonではAPP.3で「部首の決定法」が詳述されているが、H-NでもAPP.3に同じような記述がある。しかし、詳細を見ると、異なる点があることがわかる。

2-8-2-1 左右・上下両方が部首の扱い

Nelsonでは「和」が2-5-2-1のように4.の例に示され、左部首に決定とあるのに

対し、H-Nでは5.に見え、右(=伝統)部首となる。しかし、本来は4.ですでに左部首に決まっているはずである。同様に、H-Nでは「男」と「思」はそれぞれ6.と7.にあがっているが、6.の「男」では上、7.の「思」では下をとると書いてあるので、やはり階層性が機能しなくなっている。こうして、「男」も「思」も、伝統部首に戻されている。

2-8-2-2 HighをInsideに変更

Nelsonの12.は、先行のR-IのC類、あるいは後続のS&Hの7.と類似した基準や規則になっていたが、H-Nではその中身が大きく変わっている。Inside(内部)に部首があるかという設問で、「周」「巡」が例示されている。説明を見ると、「周」の部首は「冂」と思われそうだが、内部下方の「口」が該当するという。

さらに、URIでは、「冂」「口」「土」と3か所にリストされていると付け加えてある。一方、「巡」のばあい、「乚」がまず考えられそうだが、伝統部首が実は「𠂔」だという。RPIでは、ともに3.で「冂」と「乚」で決定するのに、H-NではRPIの階層制を崩してしまっている。

また、R-I、Nelson、S&Hで実質的に使用されてきた「その他」範疇の廃止がある。「左右上下・囲み」のように漢字が視覚上自然と部品に分かれるという「基本」パターンでは処理できないものとして扱われてきた「交差線」などの漢字は、これではとらえられない。いい換えれば、「事」「井」などは12ステップから消えたことになる。

2-8-2-3 絶対規則から相対規則へ

Nelson (APP3) では、12のステップを踏みさえすれば、間違いなく目標漢字にたどり着くと主張している。一方、H-NのAPP3では、「ルールは絶対ではないが、総じて利用者を正しい掲載箇所に導くガイドライン^{xxii}」だという。また、「12のステップは最も可能性のある部首から最も可能性のない順になっている^{xxiii}」ともいう。さらに、「1つ目、2つ目の検索で漢字が発見されないばあいには、利用者はURIを使用するがよい^{xxiv}」とも書いてある。URIを推奨するための変更にも見えるが、H-NではNelsonのAPP.1「漢字の検索法」にも変更をくわえている。

その理由としてあげているのは、従来、新しい部首法を考案したり、伝統的な部首法の中で漢字を配置換えしたりすることにより、漢字の分類を変える試みが多く見られるが、そうすると伝統的な日韓中の字書に慣れている利用者には使にくいという欠点がある点である。つまり、S&Hのような新部首法、またはNelsonが考えたRPSを否定している。表面的にはNelsonのシステムを維持しているように見えるが、2-8-2-1などのように、部所属を徹底して伝統的な部首に戻している。

2-8-2-4 部首を失った字の扱い

見てきたように、H-Nでは「和」「分」を伝統部首に戻しているし、「巡」のように「合理性を欠く」(1-4) 漢字でさえ「康熙字典」の部首に戻している。では、部首を失った字の所属はどうか。

「処」・「単」はそれぞれ「几」・「十」に所属させているが、これは伝統部首「乚」「口」とも異なり、Nelsonの「久」「丶」とも違う（「単」は、G-4にも違反している）。

また、2-5-1で例示した「当」について本体で確認すると、Nelson (1995) での42部「小」にはなく、相互参照もない。ところが、URSで探してみると、42部、残余画数3などに見え、1706番となっている。番号がボールド体ではないので、伝統的部首「田」には配置されていないことは分かる。1706番を本文で確認すると、58部「ㄩ」にある。これは、Nelsonとも異なり、伝統部首とも異なるが、どういう基準で所属部を選定したか、不明である。

2-9 まとめ

上記とりあげた4種の部首引き漢英字典はいずれも漢字検索のシステム化をはかっているが、発想や方法には共通点も多い一方、相違点もかなり見られる。

2-9-1 G-2規則と階層性

R-I, Nelson, S&Hはいずれも階層性を使用している。R-Iでは、全体としては部品の位置を視覚上確認することをおして検字をする方法をとっているが、B類については、G-2で優先ルールを導入している（C類では、いわばローカル階層性を採用している）。NelsonとS&Hはステップ順に検字を行うことでさらに階層性を高めているが、「基本」ステップではやはりG-2の適応が検索結果（部所属）に与える影響が大きい。

「その他」については、R-Iでは、通常の部品わけができない漢字については、表2にある、「最右」規則で対応している。一方、Nelson (12.) とS&H (6.) では一見類似したルール、「最高位置」(12.(a), 6. (d), 「最左」(12.(c), 6.(c)) を使用している。加えて、正反対ルールに見える「より少画」(12.(b)) と「より多画」(6.(b)) を設けている。

しかし、内容を再度確認すると、Nelsonのばあいは「事」の最高画のように12.(a)が主たる基準であるのに対し、S&Hでは6.(b)以下で画数の多い部首を優先している（その後の2ステップはどちらのばあいも「同等」の処理法である）。つまり、意味が全く異なるので、グローバル規則とはいえない。なお、S&Hの6.(a), 「唯一部首」は、2-7-3のように部首が激減した結果、Nelsonのばあいとはやはり意味合いが異なる。

このように見てくると、Nelsonのステップ8.~11.は他には見られない、独自

な「その他」処理となる。2-5-2-2の例字を再度見てみよう。表6では、Nelsonの処理法とR-I, S&Hで想定される扱いを示した。

表6 Nelsonの4角とR-I, S&H

検字項目	Nelson Step	R-I	S&H Step	S&H部
報	8.	LEFT幸→土	7. (b)	3b土
截	8.	WRAPPER 戔→戈	7. (b)	8c佳
求	9.	C類 J	7. (a)	2b 彳
君	10.	BOTTOM口	7. (a)	3d口
虱	11.	BOTTOM虫	7. (a)	6d虫

「求」はNelsonのシステムでも、12.(a)「J」でもよいはずだし、他の字もG-1適応で探せるので、果たしてこれらのステップは必要か、疑問は残る。

2-9-2 交差線の扱い

R-I (C類) とNelson (12.) では、「本」・「事」のような交差線のある漢字が分類の基準でなるが、グループ内ではそれぞれ独自の階層性ルールで処理される。一方、S&Hでの交差線は部首認定に使用され、「本」などは「本部」には属せないことになる (0a所属)。また、2-8-1で見たように、H-NのURIでは「黒」の切り方として「田」などを認めている。

2-9-3 部品と位置

R-Iでは部首候補の要素が、漢字に占める位置により6種類に分けているが、一覧表の中でも「包み」は表の上、左・右は左ページの右と左、上・下は右ページの上と下に配置されているので、視覚上もたいへんわかりやすいアレンジである。マスの中でも、偏は左寄り、旁は右寄りのように、実際漢字の中で現れる形で掲載してある。「その他」に当たる「中央、云々」のグループだけは、余ったスペースを利用している。

Nelsonでも、APP.13 The Radicals Classified by Position (位置による部首の分類) のように、位置によるリストを用意しているし、S&Hでも、位置で部首配列しているが、メインはそれぞれステップ制である。

3著に共通しているのは、(明示的であれ、暗示的であれ)「基本」と「その他」という分け方で、R-IとNelson「基本」ではともに97%のカバー率を明記しているが、S&Hでも10%程度と思える。利用者にとっては、Nelson, S&Hの複雑なルールの「その他」は、あまり気にせず、基本的部分に集中すればよいかもしれない

が、あいにく「その他」は画数の少ない、基本的な漢字（世、本、井、事…）が多い。

H-Nでは、他の3著のシステムを否定し、伝統的部首に戻しているが、新字体については、恣意的に見える部わけも目立つ。その矛盾は、多くの構成要素から検索できるURSで解消しようとしている。しかし、絶対的なRPSから想定のRPSに後退している面では、必ずしも一歩前進とはいえないが、漢字の所属先は伝統的な漢和字典に従っている。

注

- i 「広漢和辞典」のように、「水部」を「氵部」と「水部」に分離する字書もある。
- ii 「会意形声」は基本的に「形声」と同じだが、声符は音と同時に意味にも関与すると考えられるばあい、「新字源」では「会意形声」と分類する。
- iii 「…部首がその漢字の字源に遡り、字義によって決定されている…」沖森他編 (1996:229)
- iv 注iii参照
- v 「字統」では、会意とし、「至+人」とある。また、同書の部首索引では、「刀部」に所属している。
- vi 佐藤1996: 201-202に、方言字書も含め、22種が列挙されている。
- vii いずれも5000字、あるいはそれ以上を収録する字書なので、表外漢字も多く含まれている。
- viii Rose-Innes (1936, 2版) は、Nelson (1975:1002) で以下のように言及されている程度である (1975:11にある参考文献には1937年とあるが、同じ第2版である)。Even the substantial contributions Rose-Innes made toward standardization in his valuable character dictionary went only part way. (Rose-Innesがその価値のある漢字字書で行った、標準化への大幅な貢献でさえ中途半端に終わった。) しかし、どこが中途半端なのか、説明がない。
- ix ただ、Rose-Innes 1936の表題にある「with common abbreviations (よく使われる略字付き)」が示すように、「与」「会」などの略字体も一部掲載している。
- x 漢和字典での扱いを見ると、たとえば「新字源」(凡例三、5) では、「旧字体の部首が明確でなくなった新字体は、旧字体の部首・画数のところに配列した。」とある。一方、「広漢和」では、単・營などの配置先に「ㇿ部」を新設している。また、もとの部首の形が失われた漢字は、新たな所属を決めている(声、士部、与、一部)。なお、「当」を検索してみると、「互部」(三) に配置されている。
- xi “hierarchically ordered algorithm for finding characters”
- xii たとえば「ノ・ㇿ・ㇿ・ㇿ・ㇿ・ㇿ」などは、少なくとも本字典の範囲では単独に使われない。
- xiii 「幽」については、それ以上説明がないが、筆順でいうと、「山」のような要素の左の筆画がアルファベットの「L」字のように右へ曲がっていくので「丨」には該当せず、結果的に右が部首になると思われる。
- xiv “Note that this may or may not be resting under a canopy”
- xv S&Hでも似た規則が見られるが、2-9のように意味・使い方が異なる。
- xvi 4k10「心部」10画について例示している(概→慎→標→槍→愼→態)が、詳しい説明はない。まず、部首を見ると、左、下の順で、次に残余部分は左右(概)、上下(慎・標)、囲み(槍・愼)分解可能と見られる。
- xvii “complete strokes not crossed by a line which is not part of the radical”
- xviii 0. “If the entire character is itself a radical (or a variant of a radical), then that is its radical”

xix 同画数の漢字は、画が交差する順になっている（サブとしては、画が相互に接触する順、0a11の例、疎、野、爽、肅、曄）。

xx 「新漢語辞典」のように、「月」と「肉月」を統合するやり方も、意味は無視して形を重視する考え方である。

xxi 「広漢和」では、この2つの部首を統合している。

xxii “The rules are not absolute, but are guidelines that will generally lead the user to the correct location”

xxiii “The following 12 steps run from most likely to least likely radical placement”

xxiv “If the character is not found in the first or second try, the user may wish to resort to the Universal Radical Index”

引用文献

阿辻哲次（1989）「図説漢字歴史」（普及版）大修館書店

沖森拓也他編（1996）「日本辞書時点」おうふう

佐藤喜代治編（1996）「漢字百科大辞典」明治書院

高田智和（2005）文字番号および部首番号の起源と応用 — 『大辞典』と華英字典とRose-Innes — 「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」石塚晴通教授退職記念編、pp303-322. 汲古書院

ロゼンベルグ、オ（1916）「漢字典：五段排列」興文社

「字統」（普及版）白川静著（1994）平凡社

「新字源」小川環樹他編（初版1968、改訂版2000）角川書店

「広漢和辞典」諸橋轍次・鎌田正・米山寅太郎著（1981）大修館書店

「新漢語辞典」山口明徳・武田晃編（1994）岩波書店

Chamberlain, Basil H. (1899) *A practical introduction to the study of Japanese writing*. London: Samson Low, Marston. (2版、1905)。

Gring, Ambrose D. (1884) *Eclectic Chinese-Japanese-English Dictionary of Eight Thousand Selected Chinese Characters, Including an Introduction to the Study of these Characters as Used in Japan, and an Appendix of Useful Tables*. Yokohama: Kelly & Walsh.

Haig, John et al. (1997) *The New Nelson Japanese-English Character Dictionary: Based on the Classic Edition by Andrew N. Nelson. Completely Revised*. Tuttle Publishing.

Nelson, Andrew N. (1962) *The Modern Reader's Japanese-English Character Dictionary* (初版1962、改訂初版1966、改訂2版1975, Classic Edition 1995, Tuttle Language Library.

Rose-Innes, Arthur (1924) *Beginners' Dictionary of Chinese-Japanese Characters and their Principal Compounds*. Yoshikawa.

— (1927) *Pocket Dictionary of Chinese-Japanese characters: with Common Abbreviations and Variants but Excluding Compounds*. Yoshikawa.

— (1936) *Beginners' Dictionary of Chinese-Japanese Characters with Common Abbreviations, Variants and Numerous Compounds*, 2nd ed., Yoshikawa.

— (1937) *An annotated dictionary of Chinese-Japanese characters for serious and frivolous students*. Yoshikawa.

— (1959/2011) *Beginners' Dictionary of Chinese-Japanese Characters (Dover Language Guides)* Dover Publications. (4th ed.) “about 25,000 words”

Spahn, M. and W. Hadamitzky (1989) *Japanese Character Dictionary with Lookup via Any Kanji*.

Nichigai Associates.

Spahn, M. and W. Hadamitzky (1996) *The Kanji Dictionary*. Tuttle Publishing.